



Title	太宰治「故郷」論：『聖書知識』から読み解く「私」の変化
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2023, 7, p. 124-137
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/92825">https://hdl.handle.net/11094/92825</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 太宰治「故郷」論

—『聖書知識』から読み解く「私」の変化—

長原しのぶ

キーワード：太宰治 キリスト教 塚本虎一 生家 実行者

## 一 はじめに

「故郷」『新潮』一九四三・二）は、井上諭一が「帰去来」（昭18・6）と併せて「津軽」（昭19・11）などを論じる際に引き合いに出される形で言及されることが圧倒的に多い」と指摘しているが、現段階でも単独での詳細な作品分析が進んでいないとはいえない作品である。<sup>①</sup>「故郷」が扱われる場合、例えば大久保典夫は「帰去来」「故郷」「津軽」を「太宰の帰郷をテーマにした」作品群と捉え、「故郷」から読み取れる太宰と兄の関係を「津軽」の考察に展開させている。<sup>②</sup>また、内田道雄は「津軽」が「それなりに意欲的な目的を持つ旅」であるのに対し、「帰去来」「故郷」は「母夕子の病気を見舞うための倉卒の間に行われ

た旅」だとし、描き出される母と兄の存在を中心に「津軽」との差異について言及している。<sup>③</sup>「津軽」に繋がる作品として「帰去来」「故郷」を位置づけることも重要な観点であるが、作品「故郷」そのものを検討していくことも必要ではないか。

本論では、「故郷」の「私」が生家に向かう際に思い浮かべた「聖書」に在る「蕩兒の帰宅」を一つの軸に、作品読解を試みる。

「故郷」の「私」が想起する「蕩兒の帰宅」はルカ伝一五章一—三節を指す。『舊新約聖書 文語訳』（二〇二三年 日本聖書協会）で確認する内容は次の通りである。ある男が子供達（兄弟）に財産の生前分与を行った結果、父の傍で堅実に畑を耕す兄に対して弟は父から離れた遠方の地で放蕩な生活を送り、飢え死にの危機に至る。その段階に至って己の罪を自覚した弟は実家の召使いの一人として受け容れてもらうべく父の元へ帰ろうとする。そのような息子（弟）の帰宅を父は最大限の歓迎と愛情で迎え入れる。弟への父の対応に不満を抱く兄に、父は

「子よ、なんぢは常に我とともに在り、わが物は皆なんぢの物なり。されど此の汝の兄弟は死にて復生き、失せて復得られたれば、我らの樂しみ喜ぶは當然なり」と息子(弟)に対する愛情の正当性を論ず。以上が聖書の中から読み取る「蕩兒の帰宅」である。

「故郷」における「蕩兒の帰宅」の描写は次の通りである。

私たちは中畑さんのお家で昼食をこちそうになりながら、母の容態をくはしく知らされた。ほとんど危篤の状態らしい。

「よく来て下さいました。」中畑さんは、かへつて私たちにお礼を言つた。「いつ来るか、いつ来るかと気が気ぢやなかつた。とにかく、これで私も安心しました。お母さんは、黙つていらつしやるけど、とてもあなた達を待つてゐる。様子でしたよ。」

聖書に在る「蕩兒の帰宅」を、私はチラと思ひ浮べた。(傍線は引用者による。以下同様)

ここで「私」が思い浮かべる「蕩兒の帰宅」には、「いつ来るか、いつ来るか」、「黙つていらつしやるけど、とてもあなた達を待つてゐる様子」という「私」の帰宅を待ちわびる中畑さんや母の存在がある。「私」は、帰宅する者と迎え入れる者の構図から、罪人として悔い改めた息子(弟)を最上の衣服と食事でもてな

して迎え入れる父の姿に彼らを重ねる形で聖書の一場面を想起していると考えられる。ただし、「故郷」と聖書で大きく異なるのは帰郷の先にある存在が父ではないことだ。「故郷」において「私」が帰る場所に登場する主要人物は母と兄達、さらには第三者であり、そこに父は不在である。

先に挙げた「故郷」に続く場面に注目すると、今回の「私」の生家訪問を主導する北さんが「私」に「トランクは持つて行かないほうがよい」と進言し、その理由を「兄さんから、まだ、ゆるしが出てゐるわけでもないのに、トランクなどさげて、——」と語っている。この言葉から、大久保典夫が「津軽」の中の兄を「そのまま「家」と置き替えてもいいだろう」と読み取るように、「故郷」では家督を継いだ現在の当主である長兄が父(家)の代替者と理解することも可能である。しかし、「故郷」では次のように長兄と「私」の兄弟という関係性が殊更に目立つ。

・私は腕をのばして、長兄にも次兄にもお酌をした。私が兄たちに許されてゐるのか、あないのか、もうそんな事は考へまいと思つた。(……)結局は私が、兄たちを愛してゐるか愛してゐないか、問題はそこだ。

・私(引用者注：北さんを指す)は、ただ、あなた達兄弟三人を並べて坐らせて見たかつたのです。いい気持です。満足です。

作中には何度も「私」が長兄と他兄弟を同等に「兄たち」と述べる箇所が確認できる。「故郷」の長兄はあくまでも兄として「私」に意識されており、それは「私」の帰郷を演出した北さんの「あなた達兄弟三人」という「兄弟三人」を一括りにする表現からも窺える。つまり、長兄は確かに家を束ねる家長の役割を担うものの、「私」との繋がりにおいては兄と弟という関係を強調した形で「故郷」では描かれているといえる。この点を含めて聖書の「蕩兒の帰宅」の利用に着目すれば、父と子の物語を主とする聖書の「蕩兒の帰宅」が兄弟を意識して描かれた「故郷」に含まれる意味をどのように解釈すべきか。帰宅を許された「私」と迎え入れる人々との物語という表面的な共通点に留まるのではなく、作品の読みと関わらせる方向で考察を試みる。

## 二 塚本虎二『聖書知識』の「行方不明の息子の電話」

「蕩兒の帰宅」の利用は「故郷」の中に聖書の存在が意識されていることを示している。それを証明するように、「蕩兒の帰宅」以外にも聖書と関わる描写を確認することができる。

結局は私が、兄たちを愛してゐるか愛してゐないか、問題はそこだ。愛する者は、さいはひなる哉。私が兄たちを愛して居ればいいのだ。みれんがましい欲の深い考へかたは捨てる事だ、などと私は獨酌で大いに飲みながら、たわい

ない自問自答をつづけてゐた。

この箇所がマタイ伝五章三〇節に該当することは既に指摘されている。「愛する者は、さいはひなる哉」は、マタイ伝の「幸福なるかな、心の貧しき者」「幸福なるかな、悲しむ者」「幸福なるかな、柔和なる者」「幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者」「幸福なるかな、憐憫ある者」「幸福なるかな、心の清き者」「幸福なるかな、平和ならしむる者」「幸福なるかな、義のために責められたる者」<sup>8)</sup>という弟子に対するイエスの教えを踏まえたものとなっている。

山内眞監修『新共同訳 新約聖書略解』(二〇〇〇・一〇 日本基督教団出版局)を参考にすると、「幸福なるかな」というイエスの言葉は「いずれも通常の価値観を全く逆転させており、不幸な人々、世間からマイナスと評価され強者につけこまれるような人々が『幸い』と言われる」と理解できる。このことを念頭に置けば、「私」の「愛する者」もまた弱者を意味する言葉といえるだろう。「私」の述べる「愛する者」は「自問自答をつづける」との表現からも明確なように、「私」自身を指す。直前に語られた「私は一生ゆるされる筈はない」、「許してもらはうなんて、蟲のいい甘つたれた考へかたは捨てる事だ」という言葉からは、「愛する」ことの背後に許されぬ者としての強い自覚を読み取ることができる。この意識がイエスの言葉を導く「私」に結びついている。

さらに、「愛する者」であることの自己認識は「みれんがましい欲の深い考へかたは捨てる事だ」という自己抑制を生み出している。「捨てる事だ」は先に挙げた「蟲のいい甘つたれた考へかたは捨てる事だ」から作品内に繰り返される表現であり、「私」への兄たちの心情ではなく自分が兄たちに向かうかという言わば他力から自力への変換を確認することができる。この「私」の変化は「故郷」において重要ではないか。詳細な検討は後述するが「蕩兒の帰宅」の利用もまた、「私」の変化という側面と大きく関わっていると推測され、「故郷」が「私」の内部意識の変革を描いた物語である可能性を聖書との関連性から探っていくと考える。

前提となる聖書について注目する時、太宰治と聖書の関わりの中で、見過ごすことのできないのが塚本虎二が主筆する『聖書知識』からの影響である。津島美知子が太宰と鱧崎潤との交流に触れ、「聖書知識」が届き始めたのは、昭和十五年からではないか<sup>(9)</sup>と回想し、菊田義孝が「戦争が終わる少し前、あの人が甲府へ、それから青森県へと疎開する寸前まで、その雑誌を読み続けていたことは、ほぼ確か」だと述べていることから、「故郷」発表時は『聖書知識』の講読期間に該当する。

「故郷」は一九四三年一月に発表され、その冒頭には一九四三年六月に発表された「帰去来」(『八雲』)が登場する。

今年の夏、私は十年振りで見つめた。その時の事を、こ

としの秋四十一枚の短篇にまとめ、「帰去来」といふ題を付けて、或る季刊冊子の編集部に送った。その直後の事である。れのいの、北さんと中畑さんが、そろつて三鷹の陋屋へ訪ねて来られた。さうして、故郷の母が重態だといふ事を言つて聞かせた。(……)こんどは私だけでなく、妻も園子(二年四箇月の女兒)もみんなを一緒に連れて行つて下さるといふのである。

「故郷」は「重態」の母を見舞う理由から帰郷が始まる物語である。「帰去来」という太宰の具体的な作品名が登場することから、背景となる当時の状況を次の津島美知子の回想から確認する。

昭和十七年の秋、私は初めて太宰の生まれ故郷の金木に行つた。母が重態なので生前に修治とその妻子を対面させておきたいと、北、中畑両氏がはからつてくださったのである。これが十月の下旬で、十二月十日に母は死んだから、いま思えばまことに時を得た配慮であつた<sup>(10)</sup>。

「昭和十七年」「十月下旬」の出来事だとすれば、「故郷」の執筆に影響を与えたと考えられる時間は、「帰去来」での一九四二年「夏」から一九四二年二月までを想定できる。この期間の『聖書知識』を調査したところ、「蕩兒の帰宅」に関わる次の文章の

掲載が確認できた。

- ・「行方不明の息子の譬話 一 父の愛の勝利（初心の人達に語りしもの）」（塚本虎二主筆『聖書知識』第五百一十一号 一九四二・七・一 聖書知識社）
- ・「行方不明の息子の譬話 二 父なる神の愛」（塚本虎二主筆『聖書知識』第五百一十二号 一九四二・八・一 聖書知識社）
- ・「行方不明の息子の譬話 三」（塚本虎二主筆『聖書知識』第五百五十五号 一九四二・一一・一 聖書知識社）
- ・「行方不明の息子の譬話 四 罪の人（初心の人達に語りしもの）」（塚本虎二主筆『聖書知識』第五百五十六号 一九四二・一二・一 聖書知識社）

塚本の「行方不明の息子の譬話」はまさに「蕩兒の帰宅」と同じく「ルカ伝二五章一一節以下に有名な放蕩息子の譬話がある」の一文から始まる連載形式の文章であり、計八回<sup>14</sup>にわたって不定期で『聖書知識』内に綴られている。

本論では、先に考察した「故郷」発表に至る時間と合致する「行方不明の息子の譬話」の二から四が背景となる時間と捉え、『聖書知識』における「行方不明の息子の譬話」が「故郷」の作品分析を進める一つの手掛かりになると考える。従って、まずは「行方不明の息子の譬話」の指し示す内容を整理し、その影

響下にある「蕩兒の帰宅」の意味を探る。

### 三 「行方不明の息子の譬話」が語る〈帰宅〉の意味

「行方不明の息子の譬話」の冒頭で塚本はルカ伝二五章一一〜三七節に対する考え方を次のように示す。

普通に放蕩息子の譬話と言はれてゐるが、墮落を主題とするのではなく、無くなつてゐた息子が父の許に帰つて来た喜びを書いたもので、同じ章にある失せた羊、無くなつた銀貨の譬話と三幅対をなすのであるから、「行方不明の息子」とても改称した方がよからうと思ふ。

注目すべきは対象となるルカ伝の箇所を「放蕩息子」の話ではなく、敢えて「行方不明の息子」の話と述べていることだ。そこには、「墮落」を問題にするのではなく「父の許に帰つて来た喜び」、すなわち息子を迎へ入れる父の側の感情に関心があるとの塚本の姿勢が反映されている。一で述べた通り「故郷」に父は登場しない。「故郷」で「私」の語るルカ伝は「蕩兒の帰宅」と表現され、「放蕩息子」である自分自身に焦点が当てられている。「故郷」は「私」の語りによって展開し、「蕩兒の帰宅」も生家に足を踏み入れようとする「私」の内面に即した中で想起される。そのため、背後に置かれた「行方不明の息子の譬話」は、あ

くまでも「父の許」へ帰る息子(弟)、すなわち「私」に焦点を置く必要があるといえる。改めて父ではなく、「私」である息子(弟)を主体として「行方不明の息子の譬話」を捉えた時、何が見えてくるのか。

ここで対象となる「行方不明の息子の譬話」一〜四を確認すると、大筋を次のようにまとめることができる。漢数字は連載回を表す。

- 一 放蕩息子の譬話とは(ルカ伝の前半…弟の墮落と改心)
- 二 放蕩息子の譬話とは(ルカ伝の後半…父の対応)
- 三 弟の罪を許す父の意味とは(兄と弟の対比)
- 四 どうして罪を犯すのか(人類の罪)

一と二はルカ伝の内容を塚本が分かりやすく説明したものであり、二回に分けて「放蕩息子の譬話」の粗筋を紹介している。続く三以降は譬話が何を言わんとするものかを解き明かしていく流れとなっている。塚本は、一と二を受けて三の冒頭で次のように述べている。

以上行方不明の息子の譬話によつて大体神様がどんなお方であり、人間がどんな者でどんな状態にあるか、今後どうしなければならぬかといふことを知った。

これに加えて、一と二の「行方不明の息子の譬話」というタイトルにはそれぞれ「父の愛の勝利(初心の人達に語りしもの)」、「父なる神の愛」という副題が付されている。つまり、塚本の説く「行方不明の息子の譬話」では、父が「神様」であり、息子は「人間」と置き換えられ、父子の物語は神と人間の関係を描いた話だと理解できる。そもそも塚本が「行方不明の息子の譬話」の連載を行った目的は「基督教の根本原理を説明」<sup>(15)</sup>するためであり、最終回(八)の最後にその「根本原理」の「要点」を「父なる神は喜び迎へてその罪を悉く赦し給ふであらう。そして罪を赦された私達は、聖書を学び聖書に従つて生き、これによつて来世への準備をせねばならぬ。」<sup>(17)</sup>と記している。塚本の眼差しは罪を犯した人間を迎え入れる神の存在に注がれ、その神の下で人間である自分達がどう生きるべきかを示そうとした。そして、神と人間の関係を述べるにあたり、人間そのものがどうであるかについても塚本は「行方不明の息子の譬話」の中で言及していく。

次に、「故郷」が発表された後に掲載された「行方不明の息子の譬話」五から八の副題を確認する。漢数字は連載回を表す。

- 五 罪の本質(初心の人達に語りしもの)
- 六 救の道(初心の人達に語りしもの)
- 七 救はれし人の生涯(初心の人達に語りしもの)
- 八 来世準備の方法(初心の人達に語りしもの)

ここでは「罪」「救」「来世」の文字が並ぶ。つまり五以降では、いずれも人間の罪と救い、さらにはその先の世界を話題にしており、迎え入れる神の存在を背景に人間そのもののあるべき姿を説こうとする。先に確認したように塚本は、「行方不明の息子の譬話」の連載意図を最終回(八)で明らかにしているが、初回(一)でも該当の譬話について、「形も整つて居り内容も優れてゐて、その中に基督教がみな入つてゐると言はれる」<sup>(18)</sup>と述べる。従つて、「行方不明の息子の譬話」は最初から最後まで一貫した塚本の考えを述べる語りの中で連載されたものであり、「故郷」発表時点までに示された父(神)を軸とする解説の中にもその後展開する息子(人間)への考え方は十分に内包されているといえる。それを軸に「故郷」の「私」は「蕩兄の帰宅」を持ち出すのである。

「行方不明の息子の譬話」で描写される息子(弟)の帰郷に注目する。最初に塚本は息子(弟)が父に「財産の分け前を下さう」と言ったことについて、「何故弟がこんな申出をしたかを考へてみる」とし、次の考察結果を示す。

(…)お父さんの側がいやになつて一人で勝手に暮してみたくなつたか、それとも独立で仕事がしてみたくなつたかであらう、二十いくつ位と思はれるから。兎に角お父さんと一緒に居たくなくなつたのである。何処にもあること

あるが、概して長男は甚六であるか律儀者であるが、次男には善ければ活動的、悪ければ小才の利いた者が多い。この兄弟も恐らくさうであつたのであらう。

そもそも息子(弟)が父の側を離れた理由を「一人で勝手に」「独立で」という自立心と捉え、「善ければ活動的」と塚本は評価する。息子(弟)の性質をこのように理解する見方はその後帰郷の場面にも繋がっている。万策尽きて飢え死にの危機において息子(弟)は恥を忍んで父のところへ帰ることを決意するが、その決意と帰郷について塚本は「善き決心には早き実行が伴はねばならぬ。(…)この点に於ても弟は賢くふるまつた」とし、「彼が父の所を逃げだしたのと父にもどることとは、矢の方向こそちがへ、弟の一本調子のさつぱりした性格のあらはれ」<sup>(20)</sup>と解説する。つまり、「行方不明の息子の譬話」では父の許への帰郷を決意するという心理的選択と、その選択を実現する行動力を持つ者として息子(弟)は表現されているといえる。特に注目されるのはその行動力であり、塚本は次のように述べる。

しかし決心よりも難しいのは実行である。決心によつてあやふく狼の口をのがれた者に、実行といふ恐しい虎が待つてゐる。そして多くの人がその餌食となつて倒れる。

繰り返し強調する「実行」は、息子(弟)の行動そのものの困難さと重要性を表しており、このような息子(弟)の選択と行動はもう一人の息子(兄)との比較によって、父の無償の愛に受け止められることになる。塚本は二人の息子について、「世間では兄を立派な人間、弟をやくざ者と言ふが、基督教では兄が罪人であり、弟が義人である」と説明する。弟は自身の「放蕩」を自覚した上で帰郷を決意し、さらには実際に行動したことから「義人」として位置づけられることになるのだ。

以上のような息子(弟)の姿が読み取れる「行方不明の息子の譬話」が「故郷」の「私」に重ねられることで見えてくる作品のあり方を次に考察する。

#### 四 他力から自力へ―変化する「私」

ここで「故郷」の「私」の帰郷について整理する。「私」は「五度も六度も、いや、本当に、数へ切れぬほど悪い事をして、生家との交通を断たれてしまつて」いる状況である。「悪い事」が指し示す具体的な事柄は描かれておらず、「私ひとりか過去に於いて、ぶていさいな事を行ひ」、「私は一生ゆるされる筈はない」と語られるのみである。一方の「行方不明の息子の譬話 一―父の愛の勝利(初心の人達に語りしもの)」でも、息子(弟)の「罪」の中身は次のように述べるに留まつている。

これまでが第一段で(引用者注…塚本がルカ伝の前半箇所  
のあらすじをまとめたもの)、金持の坊ちゃんが乞食にまで  
成り下つた墮落の径路が――私の話はただらしてあるが  
――極めて簡潔に描かれてゐる。

息子(弟)の「墮落」の過程とその実際は、聖書において「遠國にゆき、其処にて放蕩にその財産を散せり」と、まさに塚本が説明する通り「極めて簡潔」に記すのみである。それを受けた塚本の描写も「ただらしてある」と言いながら、直前の場面では「知らずしらずのうちに墮落したものと思はれる」とその内実を語ることはない。「故郷」もまた同じ流れにあり、「私」の抱える帰郷を妨げる精神的な問題、生家への負い目は聖書と塚本の解説を踏襲する形で深く語られることのないまま物語を展開させる。このような共通点を確認した上で、「私」の帰郷で注目されるのは、北さんと中畑さんの二人が「私」を主導するという構図である。

「こんども私が、責任を持ちます。北さんは緊張してゐる。  
「奥さんとお子さんを連れていらつしやい。」(…)「こんどは私だけでなく、妻も園子(一年四箇月の女兒)もみんなを一緒に連れて行つて下さるといふのである。(…)」昨年  
の夏にも、北さんと中畑さんとが相談して、お二人とも故郷の長兄に怒られるのは覚悟の上で、私の十年振りの帰郷

を画策してくれたのである。

「こんども」「昨年の夏にも」とある通り、「故郷」は二度目の帰郷を語っており、一度目の帰郷の際も二人がお膳立てしたことが示されている。つまり、「私」の帰郷は「行方不明の息子の譬話」の息子(弟)のような自発的な行動によるのではなく、他者の介在によつて成立するものであるといえる。中畑さんの帰郷の提案に対して「連れていつてもらひたい」「連れていつて下さると、私は大いにありがたい」と意思表示をする「私」の姿勢は、あくまでも他者の力に依存したものだといえる。この点は「行方不明の息子の譬話」の息子(弟)に評価された実行者としてのあり方が大きく欠けていると指摘できる。

帰郷の過程と生家での様子に着目すると、「私」の他力の様子はさらに明確になる。次に該当箇所を羅列する。

- ・荷物は一切、中畑さんのお家へあづけて行く事にした。病人に逢はせてもらへるかどうか、それさへまだわかつてゐない、といふ事を北さんは私に警告したのだ。
- ・北さんも中畑さんも、あれつきりまだ二階から降りて来ない。北さん何か失敗したかな?と思つたら急に心細いやら、おそろしいやら、胸がどきんどきんして来た。
- ・「こんどは、ゆつくりして行くんでせう?」
- 「さあ、どうだか。去年の夏みたいに、やつぱり二、三時

間で、おいとまするやうな事になるんぢやないかな。北さんのお話では、それがいいといふ事でした。僕は、なんでも、北さんの言ふとほりにしようと思つてゐるのですから。」

「いや、だから、北さんに相談してみるといふのです。北さんの指図に従つてゐると間違ひないのです。(…)(…)」

・北さんも中畑さんも、離れのはうへ来なかつた。何をしてゐるのだらう。妻と園子は、母の病室にあるやうだ。今夜これから私たちは、どうなるのだらう。(…)(…)とにかく北さんに逢ひたい。北さんは一体どこにあるのだらう。

・「今夜は、どこへ泊るの?」

「そんな事、僕に聞いたつて仕様が無いよ。いつさい、北さんの指図にしたがはなくちやいけないんだ。十年来、そんな習慣になつてゐるんだ。北さんを見無視して直接、兄さんに話掛けたりすると、騒動になつてしまふんだ。(…)(…)

僕には今、なんの権利も無いんだ。トランク一つ、持つて来る事さへできないんだからね。」

傍線部を中心とする引用箇所からは、帰郷の計画に留まらず、帰郷後の動きの全てが「私」ではない他者に委ねられていることが分かる。「私」は北さんと中畑さんに思考と行動を任せることを当り前とし、その「指図」に従い、二人が側にいないことに不安と恐怖を感じている。その感情は生家で他者を介さず自己判断で動くことの恐ろしさに他ならない。つまり、「私」が「聖

書に在る「蕩兒の帰宅」を思い浮かべながら果たした帰郷は塚本が理解した聖書に示される息子(弟)のように「決心よりも難しいのは実行」とされる「実行」<sup>26</sup>を体現したのではなく、他力による受動的なものであったことが考察できる。「故郷」がこのような「私」を描くのは何故か。それは、物語の最終地点こそを強調したい意図を持つからではないかと推察する。

「故郷」の最後は「私」と次兄、長兄の三人が「小間」に坐り、最後には「一ばん上の姉が、ひっそり坐つてゐた」という場面で終わる。内田はこの場面を「私」をもその一員とする兄弟たちの和合の図柄<sup>26</sup>と解釈するが、「私」と兄弟達の間は何らかの和解もしくは関係の修復がなされたかどうかを作品内から正確に読み取ることはできない。「私」を含めた兄弟だけの集合という場が日常的な一場面のように描かれて物語は結ばれる。ただしこれは、「五所川原の先生(叔母の養子)それから北さん、中畑さん、それに向ひ合つて、長兄、次兄、私、美知子と七人だけの座席」の様子を「涙が出るほど、うれしかった」と語る北さんの「あなた達兄弟三人を並べて坐らせて見たかった」という光景の完全版ともいえる。そして、この光景を作り出す要因は「私」の自らの行動である。

(…)ふと「常居」の隣りの「小間」をのぞいて、そこに次兄がひとり坐つてゐるのを見つ、こはいものに引きずられるやうに、するすると傍へ行つて坐つた。内心、少な

からずビクビクしながら、

「お母さんは、どうしても、だめですか？」と言つた。いかにも唐突な質問で、自分ながら、まづいと思つた。

「するすると傍へ行つて坐る」という「私」の次兄への接近は、「こはいもの」「ビクビク」という兄達に抱く心情を伴うものである。次兄に発した「私」の言葉が「唐突な質問」であり、「まづい」と感じるものである点から、「私」の恐怖心が今なお決して解消されていないことは明白だ。それでも「私」は自ら働きかけるに至る。そこには、「私」の後ろ盾として常に動き続けてくれた北さんと中畑さんの退場が関係する。「私たち老人は、そろそろひつこんでいい頃です」との言葉を最後に北さんは「私」の元から去っていく。生家に到着して以来、北さん達は長兄と「私」の間を取り持つ何らかの働きかけを行つていたことが次の「私」の言葉から確認できる。該当箇所を列挙する。

・中畑さんと北さんは、すぐに二階の兄の部屋へ行つてしまつた。

・北さんも中畑さんも、あれつきりまだ二階から降りて来ない。北さん何か失敗したかな？と思つたら急に心細いやら、おそろしいやら、胸がどきんどきんして来た。

・北さんは、まだ兄さんと二階で話をしてゐるやうですが、何か、ややこしい事でも起つてゐるんぢやないでせうか。

・北さんは「一体どこにゐるのだらう。兄さんとの話が、いよいよややくしく、もつれてゐるのではあるまいか。私は居るべき場所も無いやうな気持だつた。」

・北さんは元気が無かつた。浮かぬ顔をしてゐた。酒席にあつては、いつも賑やかな人であるだけに、その夜の浮かぬ顔つきは目立つた。やつぱり何かあつたのだな、と私は確信した。

「二階」で繰り広げられたであろう長兄と北さん達の話し合いの内容とその結果は一切明かされないまま物語は進む。傍線部に注目すれば、北さん達が自分の元から離れ、長兄のいる「二階」に長時間留まつていることで、「私」の不安は増強され、「ややくしい事」もつれてゐる」という負の感情を生み出していく。それは、北さんの「元気が無い」「浮かぬ顔」がそのまま長兄から「私」への怒りと拒絶のメッセージとなつて受け止められていく様子からも見て取れる。ただし、この想像はあくまでも「私」が作り上げた「何か」であり、実際の事柄は描かれずに不明のままである。「故郷」での「私」が「金木の家」から帰されることなく、表面的には「長兄にも次兄にもお酌をした」という「酒席」が設けられていることを考慮すれば、長兄と北さん達の会談が「私」の予感するような破綻と訣別にだけ傾いているとは考えづらい。むしろ、兄弟の関係に介入することから距離を置くタイミングが来たことを感じ取つたゆえに「私」から離れる

北さんは「少しよそよそしい口調」であり、「しんみりした口調」であつたといえる。それは、「修治さんも、まあ、これからはしつかりおやりなさい」という「私」の自立と成長を後押しするものに繋がつていく。このような北さん達の退場が「私」への最後の他力として働いたのである。

他力から自力へ、この「私」の変化こそが「故郷」の最後の場面に打ち出されていく。

北さんを見送つて、私は家へ引返した。もうこれからは北さんにたよらず、私が直接、兄たちと話合はなければならぬのだ、と思つたら、うれしさよりも恐怖を感じた。きつとまた、へまな不作法などを演じて、兄たちを怒らせるのであるまいかといふ卑屈な不安で「ばい」だつた。

次兄の傍に坐り、話し掛ける「私」はこの場面の直後に描かれる。北さんを介さずに「直接、兄たちと話合」うことが「私」とつてどれほどの苦痛と恐怖をもたらすものであつたかが示されている。その「恐怖」と「不安」を乗り越える形で「私」の自力による行動が表現されていく。その姿は塚本が「行方不明の息子」の譬話——父の愛の勝利（初心の人達に語りしもの）で解説した息子（弟）の次のあり方に結びつく。

大家の坊ちやんが乞食になり果てて、錦ならぬ襪を着て

家に帰つてゆくことは、前に掲げたエジプトの放蕩息子の手紙にも見えるやうに死ぬよりも辛かつたであらう。どの面さげてと思つたのであらう。お父さんの恥、家の恥とも考へたにちがひない。しかしそれら凡てにうち勝つて彼を引き寄せるものがあつた。慈愛にみちたお父さんの顔であつた。そこで直ちに立つてお父さんのところに行つた。善き決心には早き実行が伴はねばならぬ。悪魔は実行を以て武装されない裸の決心を最もはげしく攻撃する。

「慈愛にみちたお父さん」の不在という違いはあるが、「故郷」の「私」も息子(弟)と同様に「恥」を含めたあらゆる負の感情を克服する形で「実行」を為し得る。さらにその「実行」は、「悪魔」が攻撃する前に素早く行う必要があることを塚本は示している。「私」の行動はそれを体現するように、北さん達の退場と同時に描かれていく。

以上のように、「蕩兒の帰宅」という聖書と関連する箇所から作品を読み解くことで、自力へと変化する「私」の物語として「故郷」を捉えることが可能となる。最終場面で次兄の傍に坐る「私」に対して、長兄もまた「次兄の傍にあぐらをか」く。「私」と長兄の間に会話はなく、「私」から長兄への感情も示されないまま作品は閉じる。「私」の行動の結果が兄弟関係にどのような結果をもたらすのか、「行方不明の息子の譬話」のような父(神)の許しが具体的に示されることはない。しかし、「私」

がもう一つの聖書引用の言葉として挙げた「愛する者は、さいはひなる哉」という、「結局は私が、兄たちを愛してゐるか愛してゐないか、問題はそこだ」との認識通り、兄達による他力を期待するのではなく「私」の自力という行動こそが新たな局面を生み出すのである。それは、姉をも含む兄弟全員が「ひつそり坐つてゐた」という今までになかつた状況である最終場面に繋がっている。

## 五 おわりに

「故郷」の中に引用された二箇所の聖書の記述を手掛かりに「私」を中心に読解を進めた。塚本の『聖書知識』(行方不明の息子の譬話)からの影響関係については、直接的な引用や表現の一致を指摘できるものではないが、作品の発表時期に連載が重なる点は無視できない。もう一つの聖書引用箇所と合わせて積極的にその影響を見ていくことで「私」像の描かれ方は明快になるといえる。他方から自力への変化という「私」のあり方は、前年に発表された『正義と微笑』(一九四二・六 錦城出版社)の芹川進の姿にも重なる。拙論において、『正義と微笑』と山岸外史『人間キリスト記』『ユギト』一九三七・一二―一九三八・六―一九三八・一一 第一書房)の関わりから作品の最後について、「そのまま言葉の中に留まる兄と「世界一の俳優」を志し、実際に演じる日々を送る芹川進」の違いを指摘し、「言

葉」ではなく「肉体」によって語る」人物と考察した。「肉体」は行動と実行を直接的に表現するものであり、「故郷」の「私」の獲得した地点とも結びついていく。聖書の言葉とその理解を背景に、この時期に様々な形で実行者としての登場人物が描かれた可能性も視野に「故郷」を捉えることもできるだろう。

生家への帰郷という作者にとって大きな出来事であることから、「津軽」や「帰去来」という他作品との関係性も重要であるが、「故郷」の「私」そのものがどのような像を示しているのかを考察することで作品の新たな位置づけと読みの可能性が深まるといえる。「私」の内面は最後の兄弟だけの集合場面においても恐怖と不安、戸惑いに支配されたままである。それでも相手の感情ではなく自分の感情を主体とし、行動することを選択した点に大きな一歩がある。そのような「私」を描き出すことに作品は成功しているのである。

(1) 神谷忠孝 安藤宏編『太宰治全作品研究事典』(一九九五・

一一 勉誠社)

(2) 鶴谷憲三は「故郷」について、『津軽』を論じる際、必ずといっていいほど枕として引かれる作品であるが、本格的な作品論はない」と述べる。(三好行雄・編『太宰治必携』一九八二・三 學燈社)

(3) 大久保典夫『津軽』ノオト(東郷克美 渡部芳紀編『作品論太宰治』一九七四・六 双文社出版)

(4) 内田道雄「故郷・家・私―私小説の方法に触れて―」(『国文

学』一九七六・五 學燈社)

(5) 大久保典夫は「帰去来」「故郷」だけではなく、前期作品である「思ひ出」(『海豹』一九三三・四/六/七)にも着目し、「家」にまつわる回想をしたためた「津軽」の関連作品とする。(故郷・母・家●「津軽」を視座として)『国文学』一九七九・七 學燈社)

(6) 大久保典夫は「津軽」に描かれた太宰の中の「長兄を通しての「家」への負い目」を指摘する。(注5と同じ)

(7) 鈴木範久 田中良彦編著『対照・太宰治と聖書』(二〇一四・六 聖公会出版)

(8) 該当箇所の確認と引用は『舊新約聖書 文語訳』(二〇二二年 日本聖書協会)に拠った。

(9) 津島美知子『回想の太宰治』(二〇〇八・三 講談社)

(10) 菊田義孝『太宰治と罪の問題』(一九六四・一〇 審美社) 注9と同じ

(11) 「故郷」が『新潮』に発表されたのが一九四三年一月一日

(12) 「解題」(『太宰治全集6』一九九八・九 筑摩書房)であることから、影響関係はその前月とする。

(13) 塚本虎二王筆『聖書知識』第百五十一号(一九四二・七 聖書知識社)

(14) 五回以降の掲載は「行方不明の息子の譬話 五―罪の本質(初心の人達に語りしもの)」「(聖書知識)第百五十七号 一九四三・一 聖書知識社」、「行方不明の息子の譬話 六―救の道(初心の人達に語りしもの)」「(聖書知識)第百五十八号 一九四三・二 聖書知識社」、「行方不明の息子の譬話 七―救はれし人の生涯(初心の人達に語りしもの)」「(聖書知識)第百六十三号 一九四三・七 聖書知識社)、「

「行方不明の息子の譬話 八——来世準備の方法（初心の人達に語りしもの）」『聖書知識』第百六十四号 一九四三・八 聖書知識社」と続く。

(15) 「行方不明の息子の譬話 一——父の愛の勝利（初心の人達に語りしもの）」（塚本虎二主筆『聖書知識』第百五十一号 一九四二・七 聖書知識社）

(16) 「行方不明の息子の譬話 八——来世準備の方法（初心の人達に語りしもの）」（塚本虎二主筆『聖書知識』第百六十四号 一九四三・八 聖書知識社）

(17) 注16と同じ

(18) 注15と同じ

(19) 注15と同じ

(20) 注15と同じ

(21) 注15と同じ

(22) 塚本は弟に対する父の態度に不満を持った兄が父の許を去ったことに対して、「基督教ではこの兄のやうな態度を罪といひ、悔改めて帰った弟を救はれた罪無き人といふ」とも説明する。（本論中の引用も含めて全て、「行方不明の息子の譬話 五——罪の本質（初心の人達に語りしもの）」（塚本虎二主筆『聖書知識』第百五十七号 一九四三・一 聖書知識社）に拠る）

(23) 注15と同じ

(24) 『舊新約聖書 文語訳』（二〇二二年 日本聖書協会）

(25) 注15と同じ

(26) 注4と同じ

(27) 長原しのぶ「太宰治『正義と微笑』論——二つの時間に置かれた聖句の意味——」『キリスト教文藝』第三十五輯 二〇一